

# 「祭」映画化決定!

## 「アブラクサスの祭」映画製作発表記者会見が行われました

8月11日、三春交流館「まほらホール」において、玄侑宗久原作「アブラクサスの祭」映画化に伴う製作発表記者会見が行われました。

記者会見には、原作者の玄侑宗久さんをはじめ、監督の加藤直輝さん、脚本の佐向大さん、主演のスネオハアーさん、出演のともさかりえさん、小林薫さんらが出席し、映画の制作決定までの経緯や、これからの映画制作に向けてのトークで、町民で埋め尽くされた会場を盛り上げました。

また、来場した方には、抽選で3名の方に寄せ書きの色紙がプレゼントされました。製作発表記者会見のようす

玄侑宗久 原作 / スネオハアー 初主演  
「アブラクサスの祭」製作発表記者

製作＝「アブラクサスの祭」製作委員会 制作＝オフィス・シロウズ



原作者：玄侑宗久さん

Q 初の映画化について

よりによって「アブラクサスの祭」というのには驚いたのですが、私の作品を読んだ連絡を下さる方がいらっしやいます。この作品を読んで、感銘を受けたという方は、小説がよっぽど好きな方か、アブナイ方が多いですね。(笑) 加藤監督はどっちなんだろうと拝見してましたら、どうやら両方の方ようです。

しかしながら、大変に読み込んでくださったって、脚本家の佐向さんと協力して、素晴らしい脚本になっていると思います。

Q 作品が映像化されることに関してはどう思いますか?

今回の作品の場合は、音楽というのが非常に重要だと思っています。スネオハアーさんが出演してくださっているの、音楽という点ではもうひとつ期待しています。原作というのは、きつかけ

でありまして、加藤監督を始め、みなさんの作品になりましたので、私も一観客として楽しませてもらいます。



監督：加藤直輝さん

Q なぜ、この作品を映画化したようとしたのでしょうか?

きつかけは本屋でたまたま文庫化されていた「アブラクサスの祭」を手にとったところから始まりました。

すぐに買ってその日のうちに読み終わってしまいました。その言葉で書かれた文章を読んでいるときに、僕の頭のなかで、すごいたくさんのいろいろなイメージが喚起されたんですね。

そのような具体的なイメージを感じさせてくれる小説はなかなか無く、実際、ほんとに原作を読んで映画にしたいという作品には、なかなか出会うことがなかったんですけども、今回、「アブラクサスの祭」に関しては、今お話したような、読んだときの体験がありまして、

それが一番最初に映画になるんじゃないかと思っただきつかけだったと思います。



脚本：佐向大さん

Q 「アブラクサスの祭」を脚色していくにあたって一番難しかったことはなんでしょうか?

一番始め、松田プロデューサーからお話をいただいたときは、「お坊さんがロックをする話」と聞いたので、てつきりコメディかと思っていたんですけど、おもしろそうだなと思って、原作を手にとって読んでみたら、ぜんぜんコメディではなく、しっかりしてまじめな話で、正直、脚本家の立場としては、困ったなあと思いました。(笑)

おもしろい小説ではありませんが、中心に描いているのが、浄念という人の心の動きがメインなので、それを映像化するのものはものすごく難しいことで、もちろん映画は、心の中を映すことはできないので、すべて台詞であり、行動で現していかないとイケないので、いかに浄念の心の中を表現していくかが難しかったと思います。

Q 企画がどのようにすすめてられて今日にいたったのでしょうか?

2007年の秋に監督から、こういう小説があつて、これを映画化したいと話がありました。監督と何度か話をしまして、「では、進めてみましょうか」となったのが去年の2月ぐらいです。

そこから、さらに話し合いを進めまして、原作者の玄侑さんにごあいさつに行つたんですね。そのときに原作の背景などの話を伺いまして、撮影ができるなら、福島で、三春町で撮りたいな、と思つた次第です。佐向さんにも参加していただき、「より多くの方に届く映画にしたいね」と、キャラクターですとか手を加えていきました。当初から監督は、ミュージシャンの方を主役にと考えていまして、ついに去年の年末にスネオハアーさんにOKをいただき、そこから、ともさかりえさん、小林さんに参加をお引き受けいただいた次第です。



プロデューサー：松田広子さん